

自ら選んだ渾身の十二役

- 三番三（「翁」）
- 三位（狂言「花盗人」）
- 夫（狂言「花子」）
- 船頭（能「船弁慶」）
- 住持（狂言「布施無経」）
- 座頭（狂言「月見座頭」）
- 住持（狂言「東西迷」）
- 閻魔王（狂言「八尾」）
- 男（狂言「米市」）
- 果報者（狂言「麻生」）
- 大名（狂言「栗田口」）
- 主（狂言「鱸包丁」）



# 東次郎家伝十二番

横浜能楽堂企画公演



一年間、毎月一回



# 東次郎家伝十二番



山本東次郎（やまもととうじろう）

狂言方大藏流。1937年生まれ。三世山本東次郎の長男。武家式楽の伝統を受け継ぐ山本東次郎家当主。著書に「狂言のすすめ」「狂言のことだま」など。1998年紫綬褒章受章。2007年日本芸術院賞受賞等、受賞多数。重要無形文化財各個認定保持者（人間国宝）。

山本則俊（やまものりとし）

狂言方大藏流。1942生まれ。三世山本東次郎の三男。2004年山本東次郎家一門として横浜文化賞、2007年芸術祭優秀賞受賞。2012年旭日双光章受章。重要無形文化財総合認定保持者。

山本泰太郎（やまもとやすたろう）

狂言方大藏流。1971年生まれ。山本則直の長男として生まれる。父および四世山本東次郎に師事。2010年芸術祭優秀賞受賞。2011年日本伝統文化振興財団賞受賞。重要無形文化財総合認定保持者。

山本則孝（やまものりたか）

狂言方大藏流。1973年生まれ。山本則直の次男として生まれる。父および四世山本東次郎に師事。重要無形文化財総合認定保持者。

山本則重（やまものりしげ）

狂言方大藏流。1977年生まれ。山本則俊の長男として生まれる。父および四世山本東次郎に師事。重要無形文化財総合認定保持者。

山本則秀（やまものりひで）

狂言方大藏流。1979年生まれ。山本則俊の次男として生まれる。父および四世山本東次郎に師事。

山本凜太郎（やまもりんたろう）

狂言方大藏流。1993年生まれ。山本泰太郎の長男として生まれる。祖父および四世山本東次郎に師事

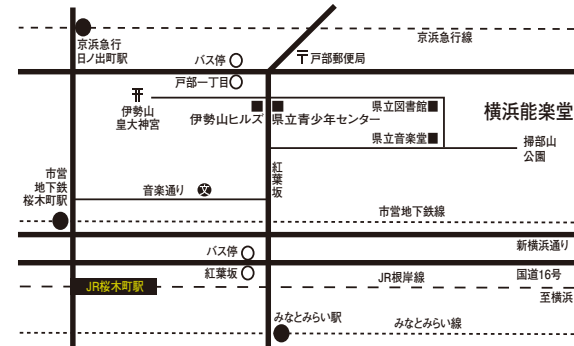
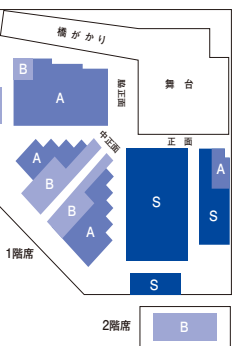
チケット料金  
第1・4回 S席：6,000円 A席：5,000円 B席：4,000円  
第2回、第3回、第5回～第12回 S席：4,000円 A席：3,000円 B席：2,500円

前半セット券（第1回～第6回）  
S席 25,000円 A席：20,000円 B席：16,500円  
後半セット券（第7回～第12回）  
S席 21,000円 A席：16,000円 B席：13,500円  
※セット券は、数量限定。

チケット発売：  
前半セット券 2019年1月5日（土）正午より  
第1回～第6回 2019年1月12日（土）正午より（初日は電話・WEBのみ）  
後半セット券 2019年4月6日（土）正午より  
第7回～第12回 2019年4月13日（土）正午より（初日は電話・WEBのみ）  
※電話予約開始日にチケットが売り切れた場合、窓口での販売はありません。

お申込み・お問合せ：横浜能楽堂 045-263-3055  
〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘 27-2  
http://www.ynt.yaf.or.jp

横浜能楽堂



交通のご案内  
■電車利用 / JR根岸線・市営地下鉄線「桜木町」駅下車徒歩15分 / みなとみらい線「みなとみらい」駅下車徒歩20分 / 京浜急行「日ノ出町」駅下車徒歩18分（タクシー利用は各駅共約5分）  
■バス利用 / 戸部1丁目（市営バス103、292系統）下車徒歩5分 / 紅葉坂（市営バス8、26、58、101、105、106系統 / 神奈中バス横43、横44、港61系統 / 江ノ電バス大船駅行、栗木行、京急バス110系統）下車徒歩10分  
※駐車場はございませんので、ご来場の際は電車・バスをご利用下さい。※内容・出演者に変更がある場合がございます。あらかじめご了承下さい。※会場への飲食物の持ち込みはご遠慮下さい。※お買い求めいただいたチケットは公演中止の場合を除き、変更払い戻しはいたしません。※公演中止の場合に旅費等の補償はできません。チケット券面顔以外は一切ご返金できません。  
〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘27-2 tel045-263-3055  
http://www.ynt.yaf.or.jp

撮影：神田佳明

<p>横濱能楽堂企画公演</p> <p><b>東次郎 家伝十二番</b></p>
--

<p><b>第1回　2019年4月20日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>「<b>翁</b>」<span>（金春流）</span></p> <p>※「翁」上演中は入場を制限させていただく場合がございます。何卒ご了承くださいませようお願い申し上げます。</p>	
翁	山井綱雄
三番三	山本東次郎
千歳	山本凜太郎
笛	竹市 学
小鼓	鶴澤洋太郎
	吉阪一郎
	古賀裕己
大鼓	安福光雄
太鼓	桜井 均
後見	金春安明　横山紳一
地謡	本田光洋　吉場廣明
	辻井八郎　山中一馬
	井上貴覚　本田芳樹
	中村昌弘　後藤和也

<p>「<b>三社風流</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(天照大神)　山本則俊</p> <p>アド(春日明神)　山本泰太郎</p> <p>アド(八幡大菩薩)　山本則孝</p>
---

<p><b>第2回　2019年5月25日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>拔殻</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(太郎冠者)　山本則秀</p> <p>アド(主)　山本則重</p>
---

<p>狂言「<b>花盗人</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(三位)　山本東次郎</p> <p>アド(何某)　山本泰太郎</p> <p>立衆(花見の衆)　山本則孝</p> <p>立衆(花見の衆)　山本則重</p> <p>立衆(花見の衆)　山本凜太郎</p> <p>立衆(花見の衆)　寺本雅一</p> <p>立衆(花見の衆)　若松 隆</p>
---

**第1回**  
「**翁**(おきな)」…「能にに能にあらず」と言われる祝祭性の強い儀式的芸能。翁(シテ方)は白式尉、三番三(狂言方)は黒式尉、それぞれ神面をつけて天下泰平・国土安穩、五穀豊穡を言祝ぎ、舞を舞う。**「三社風流**(さんじゃぶりゅう)」…風流は千歳と関わるものと三番三とがあり、これは三番三の後半、鈴ノ段の始まるところで、神仏等が登場し、祝言性をさらに高める。「三社風流」は三番三が鈴ノ段で鎧を着て舞う。三社は伊勢・春日・八幡の三神のこと。

**第2回**  
「**拔殻**(ぬけがら)」…使いに出るときはいつも酒を振る舞ってくる主が今日は忘れている。思い出してくれたものの、そんな屈託からつい飲み過ぎてしまった太郎冠者は半酔し、道の真ん中で眠り込んでしまった。主は懲らしめのため、太郎冠者の頭に鬼の面をつけてしまう。**「花盗人**(はなぬすびと)」…あまりに見事な様に思わず一枝を盗んでしまった三位(位の高い出家)、稚児に求められて、もう一枝盗みに入ったところで捕まっていますめられてしまう。盗んだ理由を問われ、花盗人は罪にならないと古歌を引いたところから、思わぬ歌問答が始まる。

4月から1年間、大藏流狂言方の「人間国宝」の四世山本東次郎が、東次郎家に伝わる曲の中から渾身の十二番を選び、毎月自ら演じます。

山本東次郎家は、江戸時代から「武家式楽」の伝統を継

<p><b>第3回　2019年6月22日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>楽阿弥</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(楽阿弥)　山本則孝</p> <p>アド(旅僧)　山本則重</p> <p>アド(所の者)　若松 隆</p> <p>笛　栗林祐輔</p> <p>小鼓　森澤勇司</p> <p>大鼓　佃良太郎</p>
--

<p>狂言「<b>花子</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(夫)　山本東次郎</p> <p>アド(太郎冠者)　山本凜太郎</p> <p>アド(妻)　山本泰太郎</p>
--

<p><b>第4回　2019年7月27日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>寝音曲</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(太郎冠者)　山本則俊</p> <p>アド(主)　若松 隆</p>
--

<p>能「<b>船弁慶</b>」<span>（観世流）</span></p> <p>シテ(静御前・平知盛)　梅若紀彰</p> <p>子方(源義経)　谷本康介</p> <p>ワキ(武藏坊弁慶)　森 常好</p> <p>ワキツレ(從者)　館田善博　梅村昌功</p> <p>アイ(船頭)　山本東次郎</p> <p>笛　杉信太郎</p> <p>小鼓　大倉慶次郎</p> <p>大鼓　國川 純</p> <p>太鼓　小寺真佐人</p> <p>後見　山中逞晶　谷本健吾　松山隆之</p> <p>地謡　観世喜正　柴田 稔</p> <p>馬野正基　角当直隆</p> <p>坂真太郎　川口晃平</p> <p>土田英貴　内藤幸雄</p>
---

**第3回**  
「**楽阿弥**(らくあみ)」…旅の途中の松原で短冊を下げた不思議な松を見つけた旅僧は、土地の人の話で尺八を吹き死にした楽阿弥の跡だと知る。旅僧が供養のため尺八を吹き始めること、楽阿弥の霊が姿を現し、己の悲運を語り、嘆き舞って回向を願う。夢幻能になぞらえた様式をもつ舞狂言。**「花子**(はなこ)」…旅先で出逢った花子が都へやって来た。妻の目を盗んで太郎冠者を身代わり置いて出掛けて行く夫。それを知った妻は激怒し、夫の帰りを待ち伏せる。朝帰した夫は担ぎを被った妻を太郎冠者と思ひ込み、花子への恋慕の情を聞かせてしまう。花子との逢瀬の場面を高度な語で描く最高秘曲。

**第4回**  
「**寝音曲**(ねおんぎょく)」…太郎冠者が謡を謡うことを知った主人は是非とも謡って聞かせると言いつける。主人の思惑を察知した太郎冠者は、命令には逆らえないが、来客のたびごとに謡わせられるは困ると、あれこれ面倒な注文をつけて謡を謡ってみせる。**「船弁慶**(ふなべんけい)」…源義経が都を追われて西国へと向かう途中の場面を描いた能。問狂言は義経一行が乗る舟の船頭として登場する。船を漕ぎながらの台詞のやりとりや、荒れ狂う海が見えるかのような神さばきなど、変化に富むダイナミックな所作が見どころ。

承する大藏流狂言の家柄。「乱れて盛んならんよりは、むしろ固く守って滅びよ」を家訓とし、品格のある硬派な芸風を守り続けています。

通常、能と一緒に演じられることの多い狂言。その内容からシリアスな能に対してコミカルな狂言などと言われることもありますが、単におもしろおかしいことをして笑わせるのではなく、狂言は人間の機微を描いた心理劇であると四世東次郎は言います。狂言のもつ

<p><b>第5回　2019年8月18日（日）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>朝比奈</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(朝比奈)　山本則秀</p> <p>アド(閻魔王)　山本凜太郎</p> <p>笛　一噌隆之</p> <p>小鼓　住駒充彦</p> <p>大鼓　亀井洋佑</p> <p>太鼓　梶谷英樹</p>
---

<p>狂言「<b>布施無経</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(住持)　山本東次郎</p> <p>アド(檀家)　山本則俊</p> <p>笛　一噌隆之</p> <p>小鼓　住駒充彦</p> <p>大鼓　亀井洋佑</p> <p>太鼓　梶谷英樹</p>
--

<p><b>第6回　2019年9月22日（日）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>法師が母</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(夫)　山本則重</p> <p>アド(妻)　山本則秀</p> <p>笛　槻宅 聡</p> <p>小鼓　田邊恭資</p> <p>大鼓　大倉慶乃助</p>
---

<p>狂言「<b>月見座頭</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(座頭)　山本東次郎</p> <p>アド(上京の者)　山本則俊</p>
---

<p><b>第5回</b>  「<b>朝比奈</b>(あさひな)」…仏教繁盛で地獄が困窮し、自ら罪人を地獄へ責め落そうと六道の辻に出た閻魔王。そこにやって来たのは猛者・朝比奈三郎義秀であった。朝比奈に打ち負かされ、言いなりになる閻魔王。朝比奈は有名な和田合戦の有様を語る。<b>「布施無経</b>(ふせないぎょう)」…今日はなぜか、お布施を下さるのを忘れている檀家。一度くらいなら仕方がないと思った住持(住職)であったが、これが常になっては困ると檀家に戻り、教化に引っかけ何とか思い出し出たらおうと懸命に仏法を説く。</p>
--

**第6回**  
「**法師が母**(ほうしがはは)」…酒に酔った勢いで妻に暴力を振るい、家から追い出した夫。しかし、酔いが覚めると後悔し、妻を探しに彷徨い出る。能「丹後物狂」を下敷きに、後半部分はすべて謡と舞で演じられる舞狂言。**「月見座頭**(つきみざとう)」…中秋の名月の夜、月を見られぬ座頭が虫の音に耳を傾け、楽しんでるのに目を留めた月見の男。和やかに酒を酌み交わし、謡い舞い、共にひとときを楽しむが、男のなかに悪戯心が持ち上がる。人間の心を鋭く覗いた名曲。

<p><b>第7回　2019年10月26日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
---

<p>狂言「<b>鍋八撥</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(浅鍋売)　山本則孝</p> <p>アド(羯鼓売)　山本則重</p> <p>アド(目代)　山本泰太郎</p> <p>笛　栗林祐輔</p>
---

<p>狂言「<b>東西迷</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(住持)　山本東次郎</p>
---

<p><b>第8回　2019年11月30日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
---

<p>狂言「<b>三本の柱</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(果報者)　山本泰太郎</p> <p>アド(太郎冠者)　山本則孝</p> <p>アド(次郎冠者)　山本則重</p> <p>アド(三郎冠者)　山本則秀</p> <p>笛　槻宅 聡</p> <p>小鼓　森澤勇司</p> <p>大鼓　大倉慶乃助</p> <p>太鼓　大川典良</p>
--

<p>狂言「<b>八尾</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(閻魔王)　山本東次郎</p> <p>アド(罪人)　山本凜太郎</p> <p>笛　槻宅 聡</p> <p>小鼓　森澤勇司</p> <p>大鼓　大倉慶乃助</p> <p>太鼓　大川典良</p>
---

**第7回**  
「**鍋八撥**(なべやつぱち)」…市の権利をめぐるって争う浅鍋売と羯鼓売。優劣を競うなかで披露される棒振りや羯鼓の舞には笛の独奏が添えられる。争いをこのように仕立てる、脇狂言ならではの祝言性に満ちた一曲。**「東西迷**(どちはぐれ)」…名譽の晴れ舞台と日常を支えてくれる檀家、両者からの同日の依頼にどちらへ行くべきか、迷いに迷う住持。虎明本をもとに2006年に山本東次郎が復曲した独り狂言。

**第8回**  
「**三本の柱**(さんぼんのはしら)」…太郎冠者、次郎冠者、三郎冠者の三人が知恵を出し合って、主人の与えた課題に見事応えていく。長さ九尺(2.7メートル)の三本の柱を担いだ三人は三間四方の舞台をめたく舞い廻る。**「八尾**(やお)」…仏教繁盛で地獄は衰退、そこで罪人を地獄に責め落そうとする閻魔王。その時亡者が差し出したのは、美僧で知られた八尾の地蔵から閻魔王に当てた手紙だった。閻魔王は独特の節でその因縁を謡い上げる。

普遍性は、現代社会に生きる私たちに、気づきや戒め、ときに救いを与えてくれます。そうした狂言への深い洞察と愛情がうかがわれるその表現は、長年にわたり多くのファンを魅了し続けています。

今回は、「翁」の三番三に始まり、能「船弁慶」の間狂言、そして通常の公演では上演頻度の少ない稀曲・秘曲も織り交ぜながら、狂言の奥深い魅力とともに、山本東次郎家の芸を余すところなくお見せいたします。

<p><b>第9回　2019年12月14日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
---

<p>狂言「<b>木六駄</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(太郎冠者)　山本凜太郎</p> <p>アド(主)　山本則秀</p> <p>アド(茶屋)　山本泰太郎</p> <p>アド(伯父)　山本則俊</p>
--

<p>狂言「<b>米市</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(男)　山本東次郎</p> <p>アド(有徳人)　山本則孝</p> <p>立衆(通行人)　山本則重</p> <p>立衆(通行人)　山本泰太郎</p> <p>立衆(通行人)　山本凜太郎</p> <p>立衆(通行人)　寺本雅一</p> <p>立衆(通行人)　山本則秀</p>
---

<p><b>第10回　2020年1月13日（月・祝）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
---

<p>狂言「<b>麻生</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(果報者)　山本東次郎</p> <p>アド(頭六)　山本則重</p> <p>アド(下六)　山本則秀</p> <p>アド(烏帽子屋)　山本修三郎</p> <p>笛　杉信太郎</p> <p>小鼓　幸 正昭</p> <p>大鼓　亀井洋佑</p> <p>太鼓　林雄一郎</p>
--

<p>狂言「<b>庵梅</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(お察)　山本泰太郎</p> <p>立衆(女)　山本則孝</p> <p>立衆(女)　山本則重</p> <p>立衆(女)　山本凜太郎</p> <p>立衆(女)　寺本雅一</p> <p>立衆(女)　山本則秀</p>
---

<p>狂言「<b>産生</b>(あそう)」…都での訴訟事が無事に叶い、晴れて近々、故郷の信濃に帰る麻生の何某。召使いの頭六は正月の出仕のため、烏帽子髪を結い、下六は注文した新しい烏帽子を取りに行く。迎春の風景のなか、舞台上で髪を結い上げる、めでたさにあふれた脇狂言。<b>「庵梅</b>(いおりうめ)」…梅香る庵に独り住む老尼・お察のもとを訪れた若い女たちは和歌の節にそれぞれが詠んだ歌をみてもらう。喜ぶお察に酒をすめ、ともに謡い舞う楽しいひととき。「狂言三老曲」の一つ。</p>
--

**第9回**  
「**木六駄**(きろくだ)」…主から山向こうに住む伯父への使いを命じられた太郎冠者は、たった一人、六頭の中に三十本の木材を載せて吹雪の山道を越えて行く。峠の茶屋で身体を温めようと立ち寄るが、あいにく酒が切れていた。茶屋の主人は太郎冠者が背負った酒樽に目を留めて…。**「米市**(よねいち)」…有徳人(金持ち)の好意に甘え、今年も年越しの米と衣類をもらいに来た男。背負った米俵に小袖を掛けてもらい、「僕の藤太殿の娘の米市御家人」と言い繕うことにするが、案の定、その姿を見とがめた若者たちにつかまってしまう。

**第10回**  
「**産生**(あそう)」…都での訴訟事が無事に叶い、晴れて近々、故郷の信濃に帰る麻生の何某。召使いの頭六は正月の出仕のため、烏帽子髪を結い、下六は注文した新しい烏帽子を取りに行く。迎春の風景のなか、舞台上で髪を結い上げる、めでたさにあふれた脇狂言。**「庵梅**(いおりうめ)」…梅香る庵に独り住む老尼・お察のもとを訪れた若い女たちは和歌の節にそれぞれが詠んだ歌をみてもらう。喜ぶお察に酒をすめ、ともに謡い舞う楽しいひととき。「狂言三老曲」の一つ。

<p><b>第11回　2020年2月8日（土）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>栗田口</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(大名)　山本東次郎</p> <p>アド(太郎冠者)　山本則孝</p> <p>アド(栗田口)　山本則重</p>
--

<p>狂言「<b>節分</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(鬼)　山本凜太郎</p> <p>アド(女)　山本泰太郎</p> <p>笛　一噌隆之</p> <p>小鼓　田邊恭資</p> <p>大鼓　佃良太郎</p>
--

<p><b>第12回　2020年3月1日（日）</b></p> <p>開場：午後1時　開演：午後2時</p>
--

<p>狂言「<b>鱈包丁</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(主)　山本東次郎</p> <p>アド(甥)　山本則孝</p>
--

<p>狂言「<b>若菜</b>」<span>（大藏流）</span></p> <p>シテ(大名)　山本則重</p> <p>アド(太郎冠者)　山本則俊</p> <p>アド(次郎冠者)　若松 隆</p> <p>立衆(小原女)　山本泰太郎</p> <p>立衆(小原女)　山本則孝</p> <p>立衆(小原女)　山本則秀</p> <p>立衆(小原女)　寺本雅一</p> <p>立衆(小原女)　山本凜太郎</p> <p>笛　藤田貴寛</p> <p>小鼓　幸 正昭</p> <p>大鼓　原岡一之</p> <p>太鼓　梶谷英樹</p>
--

**第11回**  
「**栗田口**(あわたぐち)」…近頃流行の栗田口比べを控えた大名。栗田口が何か、確信の持てぬまま、太郎冠者に都へ栗田口を求めに行かせると、「我こそ栗田口」と名乗る男を連れて来た。果たして真実か、大名は検証を始める。**「節分**(せつぶん)」…節分の夜に豆を蒔くことに興味を持った蓬萊の島の鬼が、遅々日本にやって来た。たまたま覗いた家は一人留守をする妻がいた。女の美しさに心を奪われた鬼は、小歌を謡って女の気を引こうと試みる。

**第12回**  
「**鱈包丁**(すずきばうちょう)」…祝いのための鯉の調達を頼まれたのに、用意もせず、嘘についてごまかそうとする甥。それを見抜いている伯父は素知らぬ顔で頂き物の見事な鱈をご馳走してやろうと、見事に料理する仕方を見せる。

**「若菜**(わかな)」…都での長逗留に鬱積した大名は、気晴らしに太郎冠者、次郎冠者を連れて小原野に出掛ける。うららかな春の景色のなか、そこで出会った小原女たちと心通わせていく大名たち。1987年に国立能楽堂の研究公演で山本東次郎が復曲。